日本中國學會報　第七十一集
二〇一九年十月十二日　發行　抜刷

地方劇における『封神演義』および聞仲像の展開

中塚　亮

地方劇における『封神演義』および聞仲像の展開

中塚　亮

はじめに

明代小説『封神演義』は後世の信仰に影響を與えたことで知られるが、その物語の傳播においては演劇などの藝能が大きな役割を果たしたと考えられる。[1] そのため、『封神演義』の受容を考えるためには、藝能作品における展開の狀況を明らかにする必要がある。[2]

これまで『封神演義』の演劇作品に關する研究は、宮廷大戯『封神天榜』を對象とするものが先行し、民間信仰の主な擔い手である庶民層が直接接することとなる地方劇をとりあげたものは決して多くない。[3]

その中で注目すべきは『封神演義』と目連戯の關係である。田仲一成は江西・湖南・四川などで目連戯を上演する際に、『封神演義』の演目も併せて上演されることを指摘した上で、『封神演義』に見られる陣沒者を封神し、その英靈を慰める鎭魂祭祀的性質が目連戯の孤魂超度と相通じると述べる。[4]

また、山下一夫は江西・安徽・江蘇の目連戯にて、普化天尊（聞仲）が鬼を拂う場面を持ち、その由來譚として『封神演義』の演目が目連戯に加えられたと論じる。[5]

ともに『封神演義』の演劇を介した民間信仰との接觸を考える上で重要な指摘である。ただ、兩氏の議論はいずれも『封神演義』がその地方劇の演目において具體的にどのような物語を展開し、受容層に屆けられたかに焦點を當てるものではない。

本稿では殷の太師聞仲が西岐との戰いに敗れ、その靈魂が紂王に諫言するくだりを描いた「絕龍嶺」「陰回朝」といわれる演目を題材として、さまざまな劇種・劇本を比較檢討することで、『封神演義』が演劇作品、特に地方劇においてどのように傳播し、どのような展開を遂げたのか、その一端を明らかにすることを試みる。

聞仲は、上述したように山下が目連戯との接點として名を擧げている人物であるが、『武王伐紂平話』や『列國志傳』といった殷周革命ものの先行作品には姿が見えず、『封神演義』で新たに追加されたものと考えられる。そのため、妲己や太公望、紂王といった『封神演義』成立以前から演劇で語られていたであろう人物と違い、聞仲の演劇における語られかたの狀況を見ることは『封神演義』を出發點としたその物語の傳播を探ることにつながる。

また、「九天應元雷聲普化天尊」として信仰の對象となっている聞仲の物語がどのように展開・受容されたかを明らかにすることは、『封神演義』（以下、『演義』）と信仰の關係を考える上でも意義があるといえよう。

一、聞仲の演劇作品について

聞仲が主要人物として登場する地方劇の演目としては、本稿で取り上げる「絶龍嶺」「陰回朝」がその代表的なものといえる。

それぞれ、『京劇劇目辭典』『梆子戲劇目辭典』では、以下の劇種への傳播が確認できる。[6]

○「絶龍嶺」：京劇・川劇・豫劇・秦腔（西路・東路・南路）・滇劇・漢劇・河北梆子・山東梆子・山西梆子（上黨・中路・北路・蒲州）・豫劇

○「陰回朝」：京劇・川劇・秦腔（西路・東路・南路）・漢劇・河北梆子・山西蒲州梆子

そのほかに、聞仲の北海征伐を描く「征北海」（京劇・秦腔［南路・西路］・雲南梆子）[7]、北海征伐から歸朝した聞仲が紂王の行狀を責める「大回朝」などがある。聞仲が十天君や趙公明・三霄を助太刀として呼ぶ演目もあるが、ここでは聞仲は補助的な役割に過ぎない。

『演義』に見られない外傳的作品としては梆子戲の「黑逼宮」がある。[8]同演目のあらすじは以下の通り。[9]

殷王には三人の王子（楚仲・懷仲・聞仲）がいたが、崩御に當たり次男の懷仲を後繼に任ずる。長兄の楚仲は讒言により懷仲が父王を毒殺したと騙され、懷仲を討つ。火煉聖母の元で修業していた聞仲は、下山し楚仲を北海に追放し、懷仲の息子受辛（紂王）をたすけ、登極させる。

なお、梆子戲では北海での反亂者をこの楚仲に設定し、「征北海」の前日譚と位置づける場合もある。[10]

また、京劇「九更天」では裁判官として聞仲が登場する場合があるが、これについては五章にて言及する。

これらの中でも「絶龍嶺」「陰回朝」と竝んで、地方劇として廣範に流布しているのが「大回朝」である。京劇・河北梆子・漢劇・徽劇・滇劇・川劇・豫劇・秦腔（中路・西路）・平調などで見られる演目であるが、[11]同演目では、聞仲が紂王にその行狀をあらためるよう十條の要求を突きつける場面（「陳十策」）がひとつの見せ場となっている。ここで描寫される聞仲の姿は後述（五章）するように、「絶龍嶺」「陰回朝」に見られる聞仲像と共通性がある。そこで本稿では「絶龍嶺」「陰回朝」の分析を通して、地方劇における『封神演義』および聞仲像の展開に迫ることとする。

二、梗概と劇本[12]

まず當該部分の『演義』でのあらすじを確認しておく。[13]なお、聞仲の靈による諫言部分（H）については「陰回朝」にて詳述する。

殷の太師聞仲は西岐討伐に遣わした魔家四將が敗れたとの報を受け、自ら西岐討伐に向かう。途中、黃花山で、當地を根城とする鄧・辛・張・陶の四天君と爭いになる。（A）（第四一回）

四天君を配下に收めた聞仲はさらに軍を進め、絶龍嶺にさしかか

る。かつて師匠の金靈聖母から「一生、『絶』の字に逢ってはならない」と警告されていた聞仲は不吉なものを感じる。（B）聞仲軍は西岐に至る。姜子牙は聞仲の軍容が整然としているのを見て感嘆し、黄飛虎ら諸將と軍議を行う。（C）姜子牙と對峙した聞仲は、姜子牙の罪を責める。（D）聞仲は、周軍との緒戰に勝利するも、再戰には敗れる。周軍はさらに聞仲の陣營に奇襲をかける。聞仲は奇襲こそ見破るものの大敗する。（E）（第四二回）聞仲は十天君（F）や趙公明・雲霄三姉妹らを應援に招くが、諸仙人の周側への加勢もあり、敗れる。（第四二～五一回）敗走する聞仲は、燃燈道人の策により、先回りした赤精子や廣成子、樵夫に化けた楊戩によって絶龍嶺に誘い込まれ、雲中子の通天神火柱によって殺される。（G）聞仲の靈は紂王の夢枕に立ち、諫言する。（H）（第五二回）

本稿では上述の場面を描いている、以下の劇本を檢討對象とする。戰いの部分に重きを置くものを「絶龍嶺」系とし、聞仲の靈による諫言に重きを置くものを「陰回朝」系とする。（なお、「陰回朝」系では戰いの部分は含まないことが多い）また、「絶龍嶺」「陰回朝」の範圍を超えて『演義』の物語を描く作品を便宜上「長編作品」と區分する。

【絶龍嶺】系

・中路梆子【中路】「聞仲歸天」（山西地方戲曲匯編本、一九八四年編印）[14]
・秦腔【秦A】「絶緣嶺」（陝西省城南院門德厚祥書局、一九三六年以前）[15]

【陰回朝】系

・京劇【京A】「陰回朝總講」（俗學叢刊所收光緒二五年抄本）[16]
・京劇【京B】「太師托夢」（國劇大成本、一九六九年出版）[17]
・秦腔【秦B】「太師顯魂」（陝西省城南院門德厚祥書局石印本、一九三六年以前）[18]
・南劇【南劇】「聞仲顯魂」（聶介軒述錄本、一九六二年編印）[19]
・桂劇【桂劇】「陰諫紂」（區桂劇藝術團發掘・甘棠校勘本、一九六二年編印）[20]
・梆子腔【梆子】「文太師顯魂」（俗文學叢刊所收木版本、河南、一九三二年以前）[21]

長編作品

・川劇【川A】「九龍柱」（重慶市戲曲工作委員會一九五九年手抄長江老本）[22]
・川劇高腔【川B】「九龍柱」（四川省戲曲研究所藏手抄本、一九六三年編印）[23]
・邕劇【邕劇】「絶龍嶺」（蔣少佳發掘・余一青校勘本、一九六〇年編印）[24]
・内府大戲【天榜】「封神天榜」（清・乾隆年間）[25]
・湘劇高腔【湘劇】「封神傳」（何少庭抄本、一九八二年編印）[26]　※ただし「陰回朝」部は描かない
・辰河高腔【辰河】「絶龍嶺」（連臺本「封神」第七本、一九九四年調査・記錄）[27]

三、「絶龍嶺」

まず、「絶龍嶺」系の劇本から見ていく。そのプロットを比較したものが「表一」である。

「○」は當該プロットがあるもの、「△」は不十分だがあるものを指す。「數子牙罪」の「二罪」「三罪」は『演義』との一致する數を、「◎」は「三罪」という括りを與えているものを意味する。

表一

		將四收（A）	「絶」字（B）	仲聞評（C）	罪牙子數（D）	陣絶十（F）	戰會軍兩（E）	朝回陰（H）	嶺龍絶（G）
小說	演義	○	○	○	○三罪	○	○	○	○
	中路	○	○	○	◎三罪	○	○	△	○
	秦A			○	◎三罪		○		
長編	川A						○		○
	川B						○		○
	邕劇				△二罪		○		○
	天榜	○		○	○三罪	○	○	○	○
	湘劇						○	○	○
	辰河				△	○			○

（一）黄飛虎による聞仲評（C）

「絶龍嶺」系劇本では、『演義』にみられない獨自の展開は見られない。その系統分岐のポイントは、西岐に身を寄せた黄飛虎が敵將となった聞仲を評する場面（C）の有無とその内容にある。

『演義』では、手強いとはいえ、天佑がある我々には怖れる必要はないとの口ぶりである。

（聞仲の陣容を見て警戒する姜子牙に對して）黄飛虎が傍らで言った。丞相、心配には及びません。魔家四將とて大したことはなかったではありませんか。まさに「國王の福が大きければ、巨惡は自ずから消え去る」というものです。これに對して子牙が言うには、

そうではあるが、民が安心して生活できず、兵は悪戰し疲弊するとなれば、これはいずれも太平のさまとはいえまい。（第四二回）[28]

『封神天榜』ではこれを進めて、聞仲は驕っているから心配はいらない、と述べている。

（黄飛虎は言った。）聞仲のひととなりはそれがしがよく存じております。老いてなお英雄を自認し、他人など眼中にありません。驕れる者は必ず傾き、自惚れる者は必ず覆すると申します。まさに今天命は周にあり、わが主の福は天より與えられたものです。巨悪は自ずから消え去りましょう。（第五本第四齣）[29]

一方で、中路梆子本では、

太師の腕前について申し上げれば、雌雄の二鞭を手に持ち、またがる麒麟は火花のように一日三刻で天の果てまで驅けられます。元帥には、諸將が太師に殺されないよう人馬を收めることを進言します。（第一〇場）[30]

と聞仲の強さを訴え、姜子牙に「黄元帥、聞仲を持ち上げるのはやめなされ、彼のすごさを誇ればこちらの志氣が下がってしまう。將軍は太師の技量が高いと申すが、どんなに手強い相手でも倒し方というのはあるものだ」とたしなめられる。[31]

秦腔A本も同様にその強さと恐ろしさを語り、姜子牙に「惰弱なことを申すな」と叱責されている。[32]

太師が兵を動かしたと聞けば、それがしも大いに震え上がります。太師文仲は腕前すぐれ、碧幽宮で道法を學び、二ふりの雌雄鞭を操り、誰もが認める麒麟にまたがっております。朝廷の文官武官みなが彼を怖れておりました。……元帥には、速やかに兵を收め、諸將の被害を食い止めますよう進言します。[33]

黄飛虎が聞仲を評するこの場面は『演義』・『封神天榜』を除くと、中路梆子本と秦腔A本でのみ確認され、兩本が近い傾向を持つことがわかる。

（二）「三罪」を數える（D）

もう一つのポイントが、聞仲が子牙の罪を數える（D）場面の有無と、その罪を「三罪」とする（◎）か否かである。次に、當該部分のテキストを示す。下線はそれぞれ相對應する罪を表す。

（演義）聞太師曰、你只巧知於立言、不知自己有過、今天王在上、你不遵君命、自立武王、欺君之罪、孰大於此。收納叛臣黄飛虎、明是欺君、安心拒敵、叛君之罪、孰大如此。及至問罪之師一至、不行認罪、擅行拒敵、殺戮軍士命官、大逆之罪、孰加於此。今吾自至此、猶恃己能、不行降服、猶自興兵拒敵、巧言飾非、眞可令人痛恨。（第四二回）

（中路）（聞仲）你頭頂三款大罪、還有何言語。（姜子牙）爲人在世一款大罪也喫它不起、太師如今講下三款、我如何能消受。我問你這第一款。（聞仲）這首一款大罪、你斬壞我朝軍師命官、你就有欺君之罪。

（姜子牙）我問你這二款。（聞仲）這二款大罪、你收留黃家父子五人、你有蒙君之罪。（姜子牙）我問你這三。（聞仲）這三款大罪麽、你聽了。你在西岐私立國號造反、你犯有叛逆之罪。如今三罪歸一、你還有何言語。

（秦A）（聞仲白）姜尙你有三不赦之罪你可知否。（子牙白）人生在世、一罪也躭當不起、敢言有三不赦之罪。說、一件哩。（聞仲白）我朝史官背主逃走、你有謊君之罪。收留反臣黃飛虎、你有欺君之罪。今在西岐扶立武王、你有反叛之罪。三罪逆天、有何理說。

（邕劇）不遵君命爲反叛、欺君自立是武王。擅行拒敵王命抗、大逆不臣還你强。（上第九場）

（辰河）臣反君來罪該喪、不講三綱五常。（第三場）

（天榜）（聞仲白）你只知巧於爲言。不知自己有過。你且聽我道來。【普天樂】你只曉巧如簧稱便給、卻不道造下了彌天罪。你不遵君命、自奉姬發、拒傷官兵。欺君之罪、莫大於此。更有個收叛臣相賴扶持、鬪王師獨逞凶威。欺君逆天之罪、在所難辨辭。（第五本第四齣）

中路梆子本および『封神天榜』は『演義』の擧げる「君命にしたがわず、自ら武王を立てる」「反臣黃飛虎を收める」「問罪の師を拒み、軍士・命官を殺戮する」の三つの罪を繼承し、秦腔A本・邕劇本も、うち二罪を繼承するなど、辰河高腔本以外、いずれも『演義』に基づいているといえる。

だが、中路梆子本・秦腔A本という梆子腔系劇本ではそこから一歩進んで「三つの罪」があるとしている點に注目したい。聞仲評とあわせて、兩本の關係の近さがうかがえる。

四、「陰回朝」

諸劇本の「陰回朝」のあらすじを總合すると、以下のようになる。

聞仲が登場し、自らが聞仲の靈であると名乘る。（I）紂王と妲己が宴をし（J）、醉った紂王が眠りに落ちると夢枕に聞仲の靈が立つ。（K）あるいは、紂王は眠らず、ふと見ると聞仲の靈がいる。（L）聞仲は紂王が女媧廟に參詣したことから語り起こして殷を滅ぼすのは紂王の責任であると責め（M）、あわせて紂の犯した「十不該」を數え上げる。（N）また、聞仲は周との戰いと自らの戰死を語り（O）、紂王に行いを改めるよう諫言する。（P）聞仲は、紂王が滅びるときには迎えに來る、と告げて去る。（Q）目覺めた紂王は妲己に聞仲を夢見たことを語る。（R）

これを劇本ごとに比較したものが次の「表二」である。特に注目すべき點について具體的に檢討していく。

（一）聞仲の靈の名乘り（I）

聞仲の靈が登場する際の名乘りはそれぞれ次の通りである。

（京A・B同文）忠魂未散回朝歌。面見龍顏。……老夫太宰聞仲魂靈是也。

（秦B）俺姓文、名仲、字天祥。奉旨征西、不料身故邊廷。是我忠心不退、與主託夢一回便了。

（桂劇）吾本商朝一老臣、跨下騎的黑麒麟。金鞭打出花世界、雷部總管在天廷。吾乃聞仲陰魂是也。

（梆子）俺姓文、名仲、字天祥。奉旨征西、不了身故邊廷。是我忠心不退、與主托夢一回便了。

（邕劇）我本商朝一老臣、坐下騎的墨麒麟。神鞭打出花世界、保定紂王錦乾坤。吾乃聞仲鬼魂是也。（下・第二五場）

以上のように、京劇A・B本が全くの同文、秦腔本と梆子腔本がほぼ同文、桂劇本と邕劇本が近似と三つの系統が見られる。

表二

		夢枕（K）	聞仲對面（L）	紂を責む（M）	十不該（N）	戰を報告（O）	諫言（P）	來迎約束（Q）	紂王覺醒（R）
小說	演義	○					○		○
	京A	○				○	○		○
	京B	○				○	○		○
	秦B		○	○	○	○	○		
	南劇		○	○	○	○		○	
	桂劇		○	○	○	○		○	
	梆子		○	○	○	○	○		
長編	邕劇	○			○	○			○
	天榜	○			○	○	○		○
	辰河	○			○	○			

		宴王紂（J）	聞仲登場（I）
小說	演義	○	
	京A	○	○
	京B	○	○
	秦B		○
	南劇	△	相違
	桂劇		○
	梆子		○
長編	邕劇	○	○
	天榜	○	
	辰河		相違

（二）聞仲の靈と紂王の問答（K／L）

聞仲の靈は夢枕で、あるいは現實のうちに紂王と對面するが、その際、紂王が聞仲をそれと認識できず問答する描寫が見られる。この部分は『演義』には存在しない。

（京A・B同文）（紂王）**你是妖你是怪、細說一遍。**

（秦B）（紂王）**你是神你是鬼、對朕言明。既是神就該在廟**宇站定、**既是鬼就該在墳墓安然。或是神或是鬼講說一遍。**[**爲王的超度你**]、**魂靈昇天。**

（南劇）（紂王）**是妖魔你就該**洞府修煉、是神聖入廟堂亨受香煙。**或是妖或是**怪早把身現、[請高僧**超度你**]、**魂**上九天。（聞仲）臣非是等閑輩興風作亂、臣是那老聞仲與主問安。

（桂劇）（紂王）**是妖**怪理應該入山修煉、是神靈入廟堂亨受香煙。**或是妖或是**神細**說一遍**。[**爲王的超度你**]、早早上天。（聞仲）亦非是妖魔怪前來作亂、老聞仲回朝來與主問安。

（梆子）（紂王）**你是神你是鬼、對朕**明言。**既是神就該在廟**宇停站、**既是鬼就該在墳**塋**安然。或是神或是鬼講說一遍。**[**爲主的超度你**]、**魂靈昇天。**

（邕劇）（紂王）**是妖魔你就該**入山修煉、是菩薩進廟堂坐受香煙。**或是神或是鬼**原形不現、若修道得正果、早上西天。（聞仲）亦非是妖魔怪隨風來作浪、老聞仲回朝來與主問安。

（辰河）（紂王）**既是仙就該**去仙山修煉、**既是鬼**因什麼來把王纏。**或是仙或是鬼**早把身現、[請高僧**超度你**]、好上九天。（聞仲）臣竝非妖魔怪主心休亂。我本是老聞仲轉回銀安。（第一〇場）

以上から、大まかにいって、「京劇」、「秦腔・梆子腔」、「南劇・桂劇・邕劇・辰河高腔」の三系統に分けられる。この系統分岐は上述した聞仲の名乗り場面に見られる傾向とも合致する。

内容面で注目すべき點としては、京劇A・B本及び、邕劇本を除いて「おまえを超度してやろう」（超度你）という臺詞が含まれていることである。特に南劇本ではこの引用部分の直前に「まさかばけものや幽靈が恨みを訴えに來たわけではあるまい」ともあり、これらの描寫からは、恨みを抱えた幽靈を超度する、という目連戲とも相通じるような鎭魂祭祀的性質が讀み取れる(34)。

（三）十不該（N）

聞仲が、紂王の罪を數えたてる「十不該」は『演義』には見られない。一例として桂劇本を引用する。

一にするべきでなかったのは伯邑考の屍を切り刻んだこと、二にするべきでなかったのは比干の心肝を劍で割いたこと、三にするべきでなかったのは梅伯を金殿に炮烙で殺したこと、四にするべきでなかったのは鹿臺を造り銀錢を浪費したこと、五にするべきでなかったのは楊任の兩目を抉ったこと、六にするべきでなかっ

たのは太子を金鑾に斬首したこと、七にするべきでなかったのは皇后の舌を切り落としたこと、八にするべきでなかったのは賈氏に逼り高殿から落として死なせたこと、九にするべきでなかったのは老人の骨をたたき割って試したこと、十にするべきでなかったのは孕婦の腹を破って無殘な目に遭わせたこと。[35]

劇本間で數項目の入れ替えや、順番・表現の變更はあるが、全體的には大きな違いはない。なお、「絶龍嶺」系中路梆子本も、聞仲が紂王に對面しない場面で「十不該」を唱っている。

この場面は演劇作品が展開する過程で、聞仲が紂王を責めその行狀をあらためるよう十條の要求を突きつける「陳十策」（第二七回）や姜子牙が紂王の十罪を數えたてる「數十罪」（第九五回）の影響を受けて成立したものと考えられる。

また、浙江の目連戲には雷聲普化天尊が十の罪を數え上げ、それらの罪人を擊ち殺すと語るものがある。[36]次に浙江新昌縣前良村民國三六年呂順銓本からその一部を引用する。

（小生）私は雷聲普化天尊である。今、玉旨が下され、十惡を犯した許されざる者を捉え、ひとりひとり擊ち殺すこととなった。……（小旦［電母］・小丑［雷公］）ひとつめは？（小生）不忠不孝。（小旦・小丑）ふたつめは？（小生）無禮無義……。（第一五齣「出雷」）[37]

當該部分を、鄭之珍『新編目連救母勸善戲文』など多くでは「雷公電母」等とする。ここでは雷神と、聞仲とが「罪を數える」という性格において重なり合っていることが確認できる。

（四）聞仲顯魂の目的（P／Q）

聞仲の靈が紂王の前に姿を現す目的について『演義』では、

仁政に勤しみ、賢者を求めて國の輔けとなされ。荒淫に耽り朝政を亂してはなりません。祖宗社稷を輕んじてはなりません。人言は信じるに足らず、天命は畏れるに足りません。これまでの過ちをあらためれば挽回もできましょう。（第五二回）[38]

と聞仲に語らせているように、紂王に前非を悔い、過ちを改めるよう諫言するためとする。

劇本でも「邪心を改め、よい行いをし、後世に名前を殘されますよう」（秦B）[39]や「妲己を寵愛するのはやめなされ」（京劇A・B本）[40]というように、同じく諫言をその動機とするものがある一方で、桂劇・南劇では異なる展開を見せている。ともに、「必ず仇をとってやる」との紂王の言葉に對して、聞仲は次のように答えている。

封神臺は私もかつて一度訪ねたことがありますが……天は商を滅ぼし周室を興すと定まっております。……老聞仲は雲の端より陛下にご忠告申し上げます。決して先頭を切ってはなりません。時が來れば陛下は大難を避けられません、小臣が陛下をお迎えしともに天に歸しましょう。（桂劇）[41]

陛下はこれから先の支度をしなければなりません。……三教は成湯を滅ぼし周室を興すと話し合いました。……封神榜は私も幾度か見たことがあります。……摘星樓で陛下は火災の大難を避けら

れません、そのときになれば小臣が陛下を超度してともに九天にのぼりましょう。（南劇）[42]

この兩本では殷の滅亡と紂王の死は挽回できない定めとされる。そのため、聞仲が紂王にまみえる理由も、桂劇では「衆門人に絶龍嶺前で燒かれて死んだが、陛下はまだご存知ない。王宮に歸り、ご報告せねばなるまい」となり、もはや諫言などしないのである。[43]そのかわりに聞仲は紂王の超度をここで約束する。

山下一夫は、江西（波陽弋陽腔本・湖口青陽腔本）・安徽（南陵陽腔本）・江蘇（高淳陽腔本）の目連戯において普化天尊が死者に群がる鬼を祓う「普化顯散」「趕散」などと呼ばれる場面があり、驅邪の役割を與えられていることを指摘している。[44]特に、山下も引く安徽省・涇縣の目連戯での事例では、聞仲と明記されている。[45]

上演二夜目は東方亮の妻の縊死を演じる。……中でも三夜目が（論者注：二夜目の誤りか）最もにぎやかである。東方亮の妻が自死し、溺鬼と縊鬼とが自らの身代わりにしようと爭う場面がある。その二鬼の爭いによって、聞太師が鬼を逐うこととなるのである。鬼を逐うことを「出神」という。聞太師とは、紂王の臣であった聞仲のことである（『封神榜』に見える）。俗にこれを家堂神といい、もっぱら人間の死後のことを掌る。「出神」の時、舞臺上の燈りはすべて消され、縊鬼と溺鬼は全身に紙錢を貼り、舞臺中を暴れ回り、鬼の叫び聲を上げ、その様ははなはだもの悲しい。聞太師は手に鋼鞭を持ち、鬼たちが人間を騷がせた罪を數え上げると、その驅逐を命じ、鋼鞭を向ける。鬼たちはすぐさま舞臺から飛び降り、祭檀に向かって走り去り、聞太師が後から追い立てる。[46]

論者が確認した安徽池州青陽腔本[47]・安徽皖南高腔本[48]ではともに「普化天尊」とするが、同じ安徽の南陵縣の目連戯では聞仲とするとの記述も見られる。[49]また、山西から内蒙古に傳播した北路梆子「絶龍嶺」の聞仲の臉譜においても「驅惡降福」の意味が込められているという。[50]

「九天應元雷聲普化天尊」について、窪德忠は「自分の祖先や緣者が地獄に落ちたと知ったときには、『九天應元雷聲普化天尊玉樞經』をとなえなければならない。そうすると、天尊が司命六神に命じて祖先たちを苦しみから救ってくれる」と述べている。[51]

桂劇本・南劇本に見える「陛下をお迎えしともに天に歸しましょう」「陛下を超度してともに九天にのぼりましょう」という臺詞の背景には、このような死者を鬼や苦しみから救ってくれる驅邪神としての聞仲の受容が見て取れる。「聞仲の靈と紂王の問答」（K／L）で見た紂王の「王として（高僧に賴んで）おまえを超度してやろう」との臺詞も、この「陰回朝」が鎭魂演劇として上演されてきたことをうかがわせるものといえよう。

五、聞仲もの演目の展開と、傳播の狀況について

本稿では、『演義』の演劇作品における展開の様相について、殷の太師聞仲が主要な登場人物として描かれる二つの演目を題材として檢討してきた。最後に、この檢討から何がわかるのかを整理しておく。

まず、第一に、テキストの親疎關係が確認され、その傳播狀況の一端をうかがうことができた。「陰回朝」系では京劇A本「陰回朝」・京

劇B本「太師托夢」について同文箇所が多數見られるなど、かなり近い關係にあることがわかった。

梆子腔系諸本では、「絶龍嶺」系については「評聞仲」（D）および「三罪」（E）から中路梆子本「聞仲歸天」と秦腔A本「絶緣嶺」の關係の近さが、「陰回朝」系については「聞仲の靈の名乘り」（I）および「聞仲の靈と紂王の問答」（L）から秦腔B本「太師顯魂」と梆子腔本「文太師顯魂」の近さが確認された。

「文太師顯魂」（河南）は一九三二年までに收集された劇本であり、中路梆子本については由來は明記されないが、山西省文化廳戲劇工作研究室が調査・採錄し一九八四年に出版したものである。劇本としての出版時期はおそらく梆子腔本が秦腔A・B本と同時代かそれに若干先行し、中路梆子本がもっとも新しいものとなるが、現時點で具體的な繼承關係を考えるのは難しい。ここでは、山西・河南・陝西地域の同じ梆子腔内で作品が傳播したという點を確認するに留めておく。

同じく「陰回朝」系の「聞仲の靈と紂王の對面時の問答」（K／L）の比較から、南劇（湖北）・桂劇（廣西）・邕劇（廣西）・辰河高腔（湖南）の劇本の親近性が高いことが確認できた。中でも、聞仲が死後紂王を迎えに來ると約束する（Q）設定を共有する南劇本と桂劇本はより近い關係にあるといえる。これらの劇本はいずれも長江中流から嶺南にかけてという南方域のものであり、梆子腔系劇本同樣、近接した地域内で物語が傳播している狀況がうかがえる。

ただ、現時點では劇本の收集に制限があり、傳播の狀況を論じるにはまだ資料が不足している。今後の課題としたい。

第二の特徵として、罪を數え上げる聞仲像が確認された。もともと聞仲には『演義』においても「陳十策」（第二七回）や本稿で取り上げた姜子牙の罪を數え上げる場面（第四二回）があったが、梆子腔系劇本（「絶龍嶺」）においてはさらに後者を「三罪」と括り、特に中路梆子本では「第一の罪」「第二の罪」と數え上げる演出にもなっている。加えて、「陰回朝」においては紂王の罪を數える「十不該」というエピソードが追加されている。

これらの場面に見られる、罪を數え上げる聞仲は、ある種の正義を代表し、善惡を判斷する者として振る舞っているといえる。

聞仲は『演義』において死後「九天應元雷聲普化天尊」に封じられている。これは「雲を興し雨を降らせて萬物を長養し、逆を誅し奸を除き、善惡によって禍福をさだめる」役割を擔う神である。[52] また、目連戲では雷神、とりわけ浙江では雷聲普化天尊が罪を數えている。「數三罪」の强調や「十不該」の附加は聞仲の神としての役割に沿ったものであり、これは「絶龍嶺」・「陰回朝」が九天應元雷聲普化天尊の緣起物語として受容・展開した側面を持つことを示唆している。

また、聞仲の「善惡によって禍福をさだめる」役割の强調は別の展開も見せている。清初の戲曲家朱曜（字素臣）の傳奇「未央天」においては、聞仲の後裔である聞朗が判官役をつとめており、さらには「未央天」を繼承した京劇「九更天」では判官役は聞朗から聞仲自身に改められている。[53] なお、梆子腔系「絶龍嶺」劇本に見える「わしは姓は文、名は仲、字は天祥」との名乘りには明確に、同じく國に殉じて命を落とした文天祥が重ねられているが、[54] これも聞仲にある種の「正義」のイメージが與えられている證左となろう。無論この「正義」は「善惡によって禍福をさだめる」人物には期待される性格のひとつといえる。

第三の特徵は、死者の救濟という鎭魂祭祀的性格を帶びた展開が見

られるという點である。

「陰回朝」系の桂劇本・南劇本に見られる、聞仲が紂王の死後迎えに行くという臺詞（Q）には、「九天應元雷聲普化天尊」の死者を救濟する驅邪神としての役割が反映されているといえる。また、「陰回朝」系の秦腔B本・南劇本・桂劇本・梆子腔本・辰河高腔本において、紂王が顯現した聞仲の靈に對して、「おまえを超度してやろう」と述べる場面（K／L）からも鎮魂祭祀的性格が見て取れる。

この第二・第三の特徴から、『封神演義』の物語が地方劇において信仰に近い場で受容され、信仰と結びつくかたちで展開したであろうことがわかる。

注

（1）『封神演義』の物語の流通と、信仰への影響において地方劇が果たした役割については山下一夫「『封神演義』の戲曲化と民間信仰への影響」（『東方宗教』一〇一、二〇〇三）參照。山下は同論文において梆子戲における『封神演義』演劇の概況を紹介するとともに、その物語が廟會における祀神戲曲として上演されることで、神々の由來譚として受容され、民間信仰に浸透したことを論じている。

（2）本稿では演劇を對象とするため、語りものなどのその他の藝能には觸れない。『封神演義』の語りものについては、角田美和「清蒙古車王府曲本鼓詞『封神演義』について―封神故事の演變に關する一考察」（『九州中國學會報』三六、一九九八）・同「南音『哪吒收妲己』『黃飛虎反五關』について―廣東地方に於ける『封神演義』受容の一側面」（『中國文學論集』二八、一九九九）、紀德君「北京鼓詞《封神榜》對《封神演義》的因革」（『北京社會科學』二〇〇七・六）參照。

（3）『封神天榜』研究としては、山下一夫「宮廷大戲『封神天榜』をめぐって」（『中國古典小說研究』八、二〇〇三）・拙論「『封神天榜』の成立について」（『中國古典小說研究』一四、二〇〇九）・楊晶蕾「《封神天榜》研究」（華東師範大學修士論文、二〇一七）など。より廣範に演劇作品を論じたものとしては山下一夫「『封神演義』の戲曲化と民間信仰への影響」（前掲）、拙論「『封神演義』の演劇における展開―『黃飛虎反五關』を例として」（『金城學院大學論集・人文科學編』六・二、二〇一〇）、劉茜「封神戲研究」（河北師範大學修士論文、二〇一六）などがある。

（4）田仲一成「道教鎮魂儀式視野下的《封神演義》的一側面」、『人文中國學報』二三、二〇一六。

（5）前掲、山下一夫「宮廷大戲『封神天榜』をめぐって」

（6）曾白融主編『京劇劇目辭典』中國戲劇出版社、一九八九・山西省戲劇研究所等合編『中國梆子戲劇目大辭典』、山西人民出版社、一九九一。なお、演目の各劇種への傳播狀況の記述については、あくまでも注記した資料によるものであり、これ以外の劇種には存在しないことを意味しない。

（7）前掲『京劇劇目辭典』・『中國梆子戲劇目大辭典』。

（8）前掲『中國梆子戲劇目大辭典』。

（9）「黑逼宮」（李德遠・徐德喜口述本）、『陝西傳統劇目彙編・漢調桄桄』五、陝西省文化局編印、一九五九。

（10）前掲『中國梆子戲劇目大辭典』。

（11）前掲『京劇劇目辭典』、『中國梆子戲劇目大辭典』。また、劇本としては『太師回朝全本』（老聚卷堂抄角本）、『太師回朝全串貫』（『二黃全串貫』所收車王府抄本）などがある。（いずれも東京大學東洋文化研究所雙紅堂文庫所藏）

（12）以下、本稿は拙論「武王伐紂故事の演劇における展開（三）―『絕龍嶺』『陰回朝』を例として―」（『中國演劇の流通と展開―物語の變容と

周邊メディアの役割について―』課程博士論文、名古屋大學、二〇一〇、第一部第六章〔未公刊〕をもとに加筆・修正したものである。

(13) 『封神演義』のテキストは國立公文書館内閣文庫藏鍾伯敬批評本による。

(14) 山西省文化廳戲劇工作研究室編『山西地方戲曲匯編』一一（中路梆子專輯三）、山西人民出版社、一九八四。

(15) 『絶緣嶺』陝西省城南院門德厚祥書局（九州大學濱文庫藏、『中國古典戲劇劇本小册子』第一二帙第四七册所收）。秦腔A・B本はいずれも一九三六年に濱一衞が西安訪問時に購入したと考えられる。（中里見敬・山根泰志・中尾友香梨「濱文庫所藏唱本目錄稿」六、『言語科學』四八、二〇一三、參照）

(16) 中央研究院歷史語言研究所俗文學叢刊編輯小組編『俗文學叢刊』二八四、中央研究院歷史語言研究所・新文豐出版、二〇〇三。

(17) 張伯謹編『國劇大成』國防部總政治作戰部振興國劇研究發展委員會、一九六九。

(18) 『太師顯魂』陝西省城南院門德厚祥書局（九州大學濱文庫藏、『中國古典戲劇劇本小册子』第一二帙第六册所收）。

(19) 湖北地方戲曲叢刊編輯委員會編『湖北地方戲曲叢刊』三一（南劇）、一九六二。

(20) 廣西僮族自治區戲曲工作室編『廣西戲曲傳統劇目彙編』二〇（桂劇）、一九六二。

(21) 中央研究院歷史語言研究所俗文學叢刊編輯小組編『俗文學叢刊』二七八、中央研究院歷史語言研究所・新文豐出版、二〇〇三。『中國俗曲總目稿』では河南のものとする（劉復・李家瑞等編『中國俗曲總目稿』中央研究院歷史語言研究所、一九三二。一九九三景印出版による）。また、同書に言及が見られることから、中央研究院歷史語言研究所が創設され、民間文藝組にて俗曲の收集が始まった一九一八年から、同書が出版された一九三二年までに收集されたものとわかる。

(22) 段明・何德君主編、重慶市藝術研究所編『川劇傳統劇目選集』一、貴州人民出版社、二〇〇四。

(23) 川劇傳統劇本匯編編輯室編『川劇傳統劇本匯編』二八、四川人民出版社、一九八三。

(24) 「絶龍嶺」、廣西僮族自治區戲劇研究所編『廣西戲曲傳統劇目彙編』四六（邕劇）、一九六〇。

(25) 「封神天榜」、『古本戲曲叢刊』九、中華書局、一九六四。

(26) 「封神傳」（何少庭抄本）、湖南省戲曲研究所主編『湖南戲曲傳統劇本』二九―三〇、一九八二。

(27) 張子偉主持發掘、向榮・陳盛昌資料發掘『湖南省瀘溪縣辰河高腔目連全傳』、施合鄭民俗文化基金會、一九九九。

(28) 「有黄飛虎在側曰、丞相不必憂慮。況且魔家四將、不過如此。正所謂國王洪福大、巨惡自然消散。子牙曰、雖是如此、民不安生、軍逢惡戰、將累鞍馬、俱不是寧泰之象」『演義』第四二回。

(29) 「聞仲爲人末將盡知、老恃英雄、目中無物。末將聞得自高者必傾、自滿者必覆。方今天命在周、我主洪福自天巨惡自然消散」『封神天榜』第五本第四齣。

(30) 「提起太師本領大、雌雄二鞭手中拿。跨下麒麟如燈花、一日三刻走天涯。相勸元帥收人馬、免得眾將被他殺」中路梆子本「聞仲歸天」第一〇場。

(31) 「黄元帥不要誇獎他、顯他威風滅去咱。你提太師本領大、牛大自有破牛法」中路梆子本「聞仲歸天」第一〇場。

(32) 「成王休將孺弱講」秦腔A本「絶緣嶺」。

(33) 「聽說太師發人馬、到把成王活嚇煞。太師文仲手段大。碧幽宮內學道法、全憑雌雄鞭兩把、身坐麒麟誰不誇。滿朝文武將他怕。……勸元帥早收人

和馬、免得眾將染黃沙」秦腔A本「絕緣嶺」。

(34) 「莫不是魍魎鬼前來訴冤」南劇本「聞仲顯魂」。

(35) 「一不該伯邑考碎尸萬段、二不該將比干劍剖心肝、三不該將梅伯烙死金殿、四不該造鹿臺花費銀錢、五不該將楊任挖去雙眼、六不該將太子斬首金鑾、七不該將皇后舌根割斷、八不該逼賈氏墜死樓前、九不該將老者敲骨相驗、十不該破孕婦聞之慘然」桂劇本「陰諫紂」。

(36) このほかに、抄錄年不詳（一九五六年以前）の『紹興救母記』（徐宏圖校訂、施合鄭民俗文化基金會、一九九四）でも「雷聲普化天尊」とする。

(37) 「吾乃雷聲普化天尊是也。今有玉旨發下、將十惡不赦之人、拿來一一打死。……（小旦、小丑白）一打？（小生白）不忠不孝。（小旦、小丑白）二打？（小生白）無禮無義……」肇明校訂・張思賢責任編集『調腔目連戲咸豐庚申年抄本』、施合鄭民俗文化基金會、一九九七。

(38) 「願陛下勤修仁政。求賢輔國。毋肆荒淫。濁亂朝政。毋以祖宗社稷爲不足重。人言不足信。天命不足畏。企反前愆。庶可挽回」『演義』第五二回。

(39) 「勸主公改邪心、一一行善、行好事、落下了萬古名傳」秦腔B本「太師顯魂」。

(40) 「勸我主與妲己休得憐戀。」京劇A本「陰回朝總講」・B本「太師托夢」同文。

(41) 「封神臺我也曾問過一遍……天註定商該亡周室當現。……老聞仲在雲端把主來勸、吾主爺切不可一馬當先。到後來吾主爺難免大難、爲臣的迎主公一同歸天」桂劇本「陰諫紂」。

(42) 「吾的主須得要前程打點。……三教議成湯滅周室當現。……封神榜我也曾看過幾遍。……摘星樓你難免火災大難、到那時臣度你同上九天」南劇本「聞仲顯魂」。

(43) 「被眾門人將吾以在絕龍嶺前火焚而亡。吾主尚未知曉。不免回朝奏明吾主知道」桂劇本「陰諫紂」。

(44) 前掲、山下一夫「宮廷大戲『封神天榜』をめぐって」

(45) 鄭肖厓・胡樸安・闞軼群・胡惠生編『中華全國風俗史』下篇・卷五「涇縣東鄉佞神記・目連戲」廣益書局、一九二三、二四～二六頁。

(46) 「第二夜演東方亮妻之縊死……就中以第三夜（ママ）爲最熱鬧、因東方亮妻之尋死、而有溺鬼縊鬼之爭替。因兩鬼之爭替、而有聞太師之逐鬼。逐鬼謂之出神。聞太師者、紂臣聞仲也（見《封神榜》）。俗謂之家堂神、專管人家之冥事。當出神時、臺上燈火齊滅、縊鬼溺鬼、渾身冥箔、滿臺亂撲、作鬼嚎聲、狀甚幽凄。聞太師手執鋼鞭、數其擾亂人家之罪、而下驅逐之令、鋼鞭一指、兩鬼立即跳至臺下、向檀上奔去。聞太師隨後驅逐」

(47) 王兆乾校訂『安徽池州青陽腔目連戲文大會本』、施合鄭民俗文化基金會、一九九九年。

(48) 朱建明校訂『皖南高腔目連卷』、施合鄭民俗文化基金會、一九九八。

(49) 「聞太師驅邪」、中國戲曲志編輯委員會・『中國戲曲志・安徽卷』編集委員會編『中國戲曲志・安徽卷』中國ISBN中心出版、一九九三。

(50) 「聞仲」、中國戲曲志編輯委員會・『中國戲曲志・內蒙古卷』編集委員會編『中國戲曲志・內蒙古卷』中國ISBN中心出版、一九九四。

(51) 窪德忠『道教の神々』講談社學術文庫、一九九六。

(52) 「興雲布雨。萬物託以長養。誅逆除奸。善惡由之禍福。」『演義』第九九回。

(53) 「九更天」における聞仲および文天祥については、拙論「從年畫看《九更天》戲曲的演變」（『年畫研究』二〇一五秋號、二〇一五）參照。

(54) 「俺姓文、名仲、字天祥」秦腔B本「太師顯魂」・梆子腔本「文太師顯魂」。